

曾野綾子

太郎物語・青春編



大
綾子
大
郎
物語・青春編



太郎物語・青春編

昭和五十一年八月二十日 第一刷発行
昭和五十六年六月十七日 第十一刷発行

著者 曾野綾子

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号二―二
電話東京〇三九四五―二―二（大代表）／振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

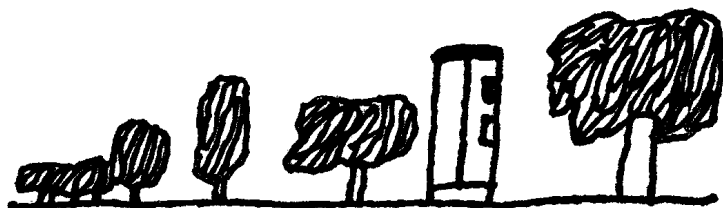
定価 八五〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

© Ayako Sono 1976. Printed in Japan

目次

第一章	南海幻想	5
第二章	都落ち	34
第三章	巣立ち	56
第四章	聖なる旅	111
第五章	対決	151
第六章	生活、また生活	206



装帧
宫田
武彦

太郎物語・青春編

第一章 南海幻想

1

高校三年生の山本太郎は、ベッドの中に寝たまま、薄目を開けて、自分の体から五米以内にあるものを見極めようとした。

明け方から、寒い寒いと思って、寝ていたが、気がついて見ると、一番上にかけていた蒲団がいつの間にかずり落ちて床の上に移動していた。そのほかあらゆるものが、机の上にあるのと同様に、床の上に置いてある。雑誌、ノート、十円玉、ズボン、ぬいだ靴下の一方は東の端に片方は雑誌の上にある、かんで丸めたハナ紙、トランペット、トレーニング・スーツ。母の信子を初めとして、あらゆる人がこのような状態を、乱雑だ、整理の悪さだ、と言うのだが、山本太郎にすれば、それらは、きわめて、人間的な、宇宙の法則にも似た荘重な理由を持ってそこに存在しているのである。

山本太郎は、何か特別の理由がない限り、兩戸というも

のを閉めなかった。第一にめんどくさいし、昼になっているのに、人工の夜を作るとは、汚いような気がした。もっとも、そのおかげで、或る年、南側の戸袋の中には、蜜蜂が巣を作ってしまった。太郎の母の信子は、小さい時英国暮らしをしたことがあって、多少英語ができるので、家でも毎日翻訳のアルバイトをしている。その結果、息子に手がまわらないことおびたらしい。大ていの母親なら、蜜蜂の巣くらい、息子が学校へ行っている隙に取り払っておいてくれるものだが、山本家では、そうはいかない。太郎は自分で、戸棚の中の蜂の巣を取ることを母に命じられ、うまくやったつもりでいて、やはり、二箇所ばかり刺されてとび上った記憶が今でもなまなましいのである。

太郎は、実はもう九割方、目覚めていた癖に、今日に限って、「オレはまだ眠っているんだゾ」と自分に言い聞かせようとしていた。実は、今日は、東京で受験した明倫大文学部の入試の発表がある日である。しかし太郎は、実は見に行くまい、と心に決めかけているのだった。つまり、受かっているだろう、という自信が全くないのである。親には言っていないが、太郎は明倫の試験の時、本当は地理を選んでいたので、まず出ないだろう、と思っていた中国が出たので、諦めて、急遽その場で日本史に切り換えたのである。

中国が出ないだろう、と思つたのは、日中国交回復の年に、中国を問題に出すのは、あまりにも軽薄だから、明倫ともあろうものが、まさかそのようなジャーナリストイックな反応は示すまい、と思つていたのである。もう一つには、中国は、社会的な統計を発表していないから、まともな地理の問題は作れる訳がない、とも考えたのである。しかし現に明倫大学は、照明が当っているように見えて実は、あまりよくわかつていない中国を出題した。大人つて奴は、いい加減なもんだ、と太郎は自分のできないことを棚に上げてむくれていた。

つまり山本太郎は、今日は起きて何もすることがないのであった。太郎は、昔から、人より睡眠時間が短くていい。五時間眠れば、一応充分であつた。六時間ずつなら、何日でも保つ。七時間も眠ろうものなら、眼玉が溶け出しそうである。

それでも、太郎は、空腹に耐えかねて、ついに起き上つてしまつた。山本家は、私大の教授である父親と、英語の翻訳をしている母親、それに、一人息子の太郎の三人である。離れに、父方の祖父母が住んでいる。太郎の父の山本正二郎は、たとえ前夜、いくら遅くなつても、朝食だけは、一家が一応揃つて食べるべきだという考え方を持っていた。そう聞くと、いかにも律義な家風に見えるが、朝食

に起きて来た両親の顔を見ると、太郎はいつも、へびとには見せられねえや」と思つたのであつた。父も母もガウンのままである。太郎に至つては、バジャマの上に、床の上に落ちていたトレーニング・スーツの上着を着て、すうっとダイニング・キッチンの食卓に坐つた。「おはよう」も言わなかつた。

「何で、そんなに機嫌が悪いの？」

母の信子は言つた。

「何でもない」

「試験に落ちてると、そんなにショックなの？」

「ショックじゃないよ。只ね、僕たちは今、感情不安定な年頃なのよ。わかんないかなあ。ちよつと氣にくわない言い方をされただけで、スブリと相手を刺すような年頃なんだよ」

太郎は言いながら情なかつた。多分入っていないと思われる大学入試の発表の朝のうつとうしさを表現するのに、今の言葉は実に不適当であつた。太郎としては、親に一步譲つて、自分の心情を説明してやつたつもりなのだが、これでは、何だか上機嫌のように見えるし、こんなことを言う人間に限つて、かつとなつて人を刺すこともできないということを、自ら告白しているようなものである。

「実は、今日、発表見に行かないつもりなんだ」

太郎は告白した。

「どうして？」

「だって入ってる可能性殆んどないんだもん」

「ずっと見に行かないの？」

「明日行くよ。ホケツの発表明日あるもんね」

山本太郎は、大学を二つ受験していた。二つとも私立で、

一つは名古屋の北川大学、一つは東京の明倫大学である。

二つを比べれば明倫の方が世間通りはいいが、太郎は、高校の初めから北川大学に行きたいと思っている。人類学科に入って、一生、儲らない《人類学》という学問をやりたのである。試験も、初めは北川一本にしほろうと思ったのだが、さすがに、それは無謀だと周囲に言われて、明倫を受けることにしたのである。

「ねえ、ねえ、万が一、明倫に入ったら、ちゃんと入学金払ってくれる？」

太郎は母に言った。北川大学の発表は、ずっと後だから、明倫の入学申し込みをしないで置いて、北川も落ちていたら、太郎は行く所がなくなるのである。

「だって、太郎は、明倫へは、あんまり行きたくないんでしょ。北川だけしか自分の入る大学はない、と思いつめてるんでしょ」

母はわざと芝居がかった言い方をした。

けち！ と太郎は心の中で悪態をついた。大ていの母親は、かなり生活が苦しくたって、息子が大学へ入るから知らないかの境目には、保険金のつもりで、使わないかも知れない入学金くらい払ってくれるものなのだ。それを、この家では何万円かが惜しいとなると、息子に浪人さえ、させる気なのである。

「仕方なからう」

それまで黙っていた父の正二郎が言った。

「他のことに金を出すのとは違う。明倫にそれだけ寄附をすると思えば、ムダな金じゃない。学校側にしても、半ば、当てにしている金だ」

正二郎は、自分の出ている大学のことを思い出してから、助け舟を出してくれた。

山本太郎は、さりげなくしていようとは思ってたが、何とんでも、間が持てなかった。このもわっとした気分をとり除くには、体を動かすことがいいことはわかってる。山本太郎は、陸上競技で百米を走っていて、受験準備中も、毎日のように、トレーニングを続けていたのだから、今日も、四、五軒走ってくれば、かなり気分が爽快になるだろう、ということは目に見えていたのであった。わかってるのに、それができない理由は、もしかすると、一緒に明

倫を受けた黒谷久男が、何か知らせて来るかも知れないと思つたからである。

「おい、今、見て来たけどなあ」

太郎は、黒谷から電話がかかつて来ることを想像する。

「お前の、入つてたぞ」

この科白は

「お前のなあ、一応見て見たけど、見当らなかつたようだぜ」

でもいいのである。黒谷が、太郎の受験番号を覚えているかどうかわからないが、ちよつとその話をしたことはあるのである。太郎の受験番号は、「一一五七四」であつた。「イイコトナシ」と読めないでもない。黒谷は「四三七一四」というのであつた。

走りに行つて、その間に、黒谷から知らせのあつた場合のことも、太郎は想像するのだつた。

「あ、そう。やつぱりだめのねえ。久男君は入つたの？ よかつたわねえ。太郎はきつと羨しがると思うわ。

太郎はね、本当は浪人するのが恐ろしくてたまらないの」

お袋はそんなふうに言うに違ひない。あの女は、何でも本当のことを言ひさえすればいいと思つてゐる。もちろん、太郎は、母が、

「まあ、そうでしたの。ご親切に。ええ、もう、うちの子

は初めから、明倫はダメだつて諦めてましたのよ。うちの子、それほど頭よくないんですもの」

などと言われたら、それも「嘘つけ」という感じになるだろう、と思う。

太郎は何となく、今日一日は現場に居合わせなければいけないような気がしてゐた。外から帰つて来て、母から「太郎、あんただめだつたらしいわよ」などと聞かされるのは、どう考えても心臓に悪いように思う。

黒谷は、しかし、まず、こちらの受験番号など覚えていないだろう。「イイコトナシ」なんていう番号は「イミナイヨ」などと覚え違へてゐるに決つてゐるのだ。

階下でベルが鳴つた。太郎は、体中でその気配を聞いていた。

「いいえ、違いますよ。うちは内山じゃありませんよ」

つつけんどんではないが、女としたら、およそ愛想の悪い母親の聲が聞えて来た。かけまちがつたのは向うが悪いのだが、あんな声を聞いたら、相手は今日一日人生に絶望感を抱き続けるだろう。

今年、明倫と北川を落ちたらどうするか。一応来年をめざして、自分はやるだろう。来年も明倫と北川を落ち、さうい年も同じような運命になったらどうするか、だ。

すると、突然、山本太郎の目には、一見何の脈絡もない

ような一つの光景が見えて来るのだった。それは夕映えの鮮かな南の海であった。波は珊瑚礁にさえぎられてゐるのか、ほとんど、ないに等しかった。水は青くすらなく透明で、その間に、魚が群をなして泳いでいた。

太郎はクリ舟に乗って夕陽に向つていた。それが、あらゆる試験に失敗した、自分の、なれの果ての姿なのであった。ここには人間の生をおびやかす寒さもなかった。永遠に滔々と過去から未来に流れる自然以外、何ら人為的な刺激もなかった。太郎は南海の漁夫なのであった。彼はパンツ一枚しかはいていなかったのだ。彼の日常にとつて、パンツ以上のものは、殆んど何もいらないと言つてよい。魚は自分が食べるだけと、あとほんの少し、市場で現金に変える分だけを捕る。それ以上捕つても、冷蔵庫もなければ、出荷する場所もないのだ。

太郎は、あたかも夕陽を捕えようとするかのように、ぱつと網を投げた。数匹の極彩色の魚がとれた。太郎は魚をしぶしぶ引き上げる。そして舟の中に仁王立ちになりながら、ふとはるか昔、自分が受験勉強に苦しんでいた頃を思うのだった。自分はあらゆる試験に落ちた。日本の社会は、試験に落ちた者には冷酷だった。いや、たとえ大学に入れても、程度の悪い大学では、就職も思うままではないというのだ。

それで、自分は南海へ流れて来たのだった。なぜ、北へ行かなかつたか。南なら衣服がいらないし、バナナが生えている、と思つたからである。バナナ、という植物は、実に偉大なものらしい。太郎は必らずしもバナナが好きではないが、それでも地球が飢餓に苦しむようになったら、バナナがたやすく生える南に行こうとは思つてゐる。また、なぜ漁夫になつたか。それは、太郎が、泳ぎが上手で、魚とりにも自信があるからであつた。

夕陽はますます赤く輝き出した。そうだ、かつて或る人間が生きられなかったことなどないのだ。アフリカやインドでは、飢えに死ぬ人がないとは言えない。しかし、多くの土地では、人間は、どうやら働いて食物を得ることはできる。それが生きる、ということの原型だ！ 決して、人聞きのいい大学に入り、日本風の出世をすることだけがこの世ではない。

太郎の空想はそこで突然、うち切られた。階下では再び電話のベルが鳴つてゐた。クリ舟はひっくり返り、夕陽は消えた。太郎は、乱れたベッドに引っくり返つて、目の前には、疲れた力ない、セビヤがかった都会の冬の空があつた。

「もしもし」

母の信子の声が聞えている。

「ああ、木戸さん」

木戸さんというのは、母が、もっぱら推理や探偵小説の翻訳をしている巴書房の、母の係の編集者の青年なのであった。

「寒いわね。風邪なおりました？」

木戸さんはまだ二十代の若い人だが、くしゃみとハナミズがとまらないので、もしかすると見合いをする相手から、ふられるかも知れない、と母が言っていたのを、太郎は思い出した。

「それはよかったわね。え？ 本のこと？ あら、そんなに出的の？ 信じられないわね。お宅の仕事をするようになって初めてじゃないかしら。二万五千部？ すごいわねえ。今までの最高が、ウッドワードの《垣の向うの人》ですよ。そう、もう大分前。あれが、一万六千部出たの。ええ、夢のように売れたのよ。でも今度は最高ね」

母の信子は、ごく最近、アメリカの若い作家のウィリアム・モロウという人の《魂の溶ける夜》というのを訳したのだった。《オカルトかね》と父は言い、太郎は《エロかな》と考えていた。それはアメリカの中西部の平凡な一家を次々に襲う平凡な悲劇の物語だった。そんな地味な話だが、どうやら、巴書房としては信じられないほど、売れ行きがいい、というのである。

小説か何か知らないが、読む方は他人の不幸を喜んで読んで、それで儲けた母もにこにこしている。厚かましいもんだ。太郎は、ふつといやな気がした。一家の中にそうそう、いいことばかりはないものだろう。母の翻訳した本がもし売れる、とすれば、必らず、自分が大学に落ちる、というようなバランス・シートが待っているものなのだ。

2

山本太郎は、ついに午後二時を少し過ぎると、たまりかねて階下に入り、いつものように仕事机に向っている母の信子に声をかけた。

「僕ちよっと、行つて来らあ」

「そう、行つておいで」

母は翻訳の仕事から眼も上げなかった。《どこへ行くの？》と訊かれたら、《うるせえなあ。ちよっとそこら辺までだよ》と答えるつもりだったが、訊かれないと、又拍子抜けした。

「おやじさんは？ 大学へ行ったの？」

「知らないよ。今日はそうじゃないと思うよ。ちよっと、本屋まで行つて言つてたから」

「あんた、あんたの旦那さん、浮気してるかも知れないよ。気になんないの？」

と太郎はおふくろに言ってみた。

「ちよつと、黙つてて。今、それどころじゃないんだから」

太郎は氣勢をそがれた。

「映画見て、夕飯までには帰つて来るよ」

又、心ならずも、きちんとした息子になつてしまった、

と太郎は思いながら、そう母親に声をかけて出た。太郎は決して、そんなに律義にはなりたくなかった。只、おふくろが時間ぎりぎりまで翻訳して、それから大急ぎで野菜を切ったり、肉を焼いたりして、少しも心をこめない夕食を恐ろしい手早さで用意して、それで自分が帰らないと、おふくろが水にもどした干すいきみたいなぼんやりした顔になる様子が目に見えるようなので、辛うじて太郎は筋を通してしまふのであった。

太郎は町の雑踏の中に入ると生き返つたような気がした。タバコは、ニコチンの味がうまいんだ、と言つているおかしい男が、いつか父の所へ出入りしていたことがあったが、太郎にすれば、公害が町の味なのであった。排気ガスの匂い、スモッグ、騒音、不潔な街路。これが町中、公園みたいにきれいに掃除され、あたりは音もなく、空気が澄んで、東京のどこからでも秩父連山なんか見えるようになったら、じいさん、ばあさんは喜ぶかも知れないが、

若い太郎は虚しくてたまらないだろう、と思う。映画を見るにも、ゴーゴーを踊るにも、喫茶店に入るにも、自分は町の真只中におり、秩父連山なんかこの世にあることを忘れていられるからこそ、楽しいのである。しかし公害がいなくなって言うとは後から殴られそうだから、太郎は決して、そんなことを口にはしない。

太郎はすぐ近くの繁華街まで、約一駅を歩いた。この頃、三軒や四軒のところは必ず歩くことにしている。間もなく東京ともお別れかな、という気もするし、そんなにうまいこと北川大学へ入れている、と当てにすることも甘いような気がする。

Jには映画館が二軒あった。うち一軒は、今はボルノ映画館である。このところ、試験が終つてから、たてつづけにボルノを二本見たらすっかり食傷したので、今日はもう一軒で、やくざ映画を見ることにした。ちょうど入れ替えの途中で、太郎は、二十人ちよつとくらいいしか見物人のいない、寒々とした映画館のかなり端の方を選んで坐つた。これは、純粹に心理の問題で、彼は映画を見る時、何となく、斜から見ているのが好きなのである。

ジイジイと開幕ベルが鳴つて、照明が暗くなる一瞬に、便所に一番近いドアから入つて来て客席のど真中あたりに席を占めた男の姿を見ると、太郎は思わず、小さな声で、

「ついでねえなあ」

と呟いた。入って来たのは、父親の山本正二郎であった。実に映画の楽しさが半減した感じである。「お父さまと二人して」、やぐざ映画を見るなんて、みつともなくて、ひとにも言えたもんじゃない。太郎はこのまま出て行くか、とも思ったが、なけなしの小遣いをまるまる捨てるのは、何とも惜しいような気がした。太郎は、予告とタイトルが終るまでの間、落ちつかない思いで坐っていたが、ついに、決心を決めると、父の隣の席に移って、どかんと坐った。

「何だって、こんな映画に來たんだよう」

太郎は呟いた。

「お前こそ、何で來たんだ」

正二郎は笑った。

「ボルノは退屈だもんね。あんなもの、十八歳以下のガキの見るもんだわさ」

承認したわけではないが、太郎は状況を致し方ない、と思うことにした。太郎が好きなのは、バクチ場の場面である。今日のは違うが片肌脱いだ壺ぶりの江波杏子が、「入ります」というところが何ともいえないのである。

「ねえねえ、おやじさん」

太郎は、親分の家集った紋つきの男たちが目をつり上

げて凄むのを見ながら囁いた。

「いま、おもしろいこと思いついたよ」

「何だ」

「ギャングでも、マフィアでも、スパイでも、悪い奴の親玉には、普通の映画じゃ、決して奥さんが出て来ないね」

「そうだな」

「ゴッド・ファーザーみたいな芸術映画は別なんだろうけどさ、やっぱり、ばつさり殺すときに、殺す相手が人間的だと困るんだろうね。おかみさんを出すと、いくら悪親分でもちよつとは女房に、やさしい目つきなんかしちゃうだろ。そういう人間が、悪い奴だと思わせるのもむずかしいし、悪い奴でも、残された奥さんが可哀想だわ、ということになるとまずいんだよ、きつと」

「まあそうだろうね」

別に、おやじとなんか喋りたいわけではないが、太郎は、思いつくと、口にしたくなる。これは一種の精神の垂れ流しなんじゃないだろうか、と自戒しているが、喋ること、気持の上の整理をつけたのである。

映画が終ると、その代り太郎は、父親を置き去りにして、とおが如く、外へ出た。映画館は地下一階なのだが、階段を三段ずつとび上った。そうなると、陸上競技で鍛えた脚だから、太郎より早く、入口を出る者はなかった。太

郎は、入口に立って、じっと出て来る人々を待ち、やがて父親と顔を合わせた。

「何があったんだ」

山本正二郎は、別に驚いてもいないらしい表情で尋ねた。

「何でもないけどさ、僕ね、やぐざ映画から出て来る人の恰好見るの好きなんだよう」

「なぜ？」

「皆、まだ、興奮さめやらぬ顔してさ、自分がやぐざになったみたいに、ガニ股になって歩いてるもんね」

父子は滑り込みで夕食に間に合った。

「今日は、ホンヤク何枚やったの？」

太郎は本当はそんなことには興味なかったのだが、母に對するご機嫌とりのつもりで尋ねた。

「十六枚半」

「まあまあだね」

本音は何がまあまあだか、さっぱりわからなかった。まあまあ、とは、日本的ないい表現だと思う。まあまあ、とは英語に訳すと何と言うのかな、と考えていた。

「実はね、お父さんにも、今日、ちょっと本気で相談しようと思ってただけ」

信子は言った。

「何？」

太郎は受けた。

「リコンの相談？」

これも、不機嫌から来る、精神の下痢症状であった。

「太郎が名古屋で住む場所のことだけどね」

「まだ、名古屋へ行けるかどうかわからないじゃないか。縁起でもないこと言わないでよ」

太郎は、自分の中にも、図々しさと目を当てて見られない小心さが、同居しているのを感じる。名古屋の下宿の予定など立てたが最後、北川大学は必らず落ちると思うのである。世の中はそう言ったものののだ。予定たてた通りにことがなるのだしたら、日本経済の発展に関して現在までのところ希望に満ちて悲観的な見方を続けて来たマルクス経済学者たちも、デモ隊がどういう動きをするかわからないので待機している機動隊員たちも、すれ違いのドラマを書くテレビの脚本家たちも、あらゆる学生、あらゆる技師、あらゆる親たち、そしてあらゆる政治家も、全部いらないのだ。

「私は太郎と違って、そんなに感傷的じゃないのよ」

母の信子が言った。そんなことわかってますよ。ズダ袋みたいなスカートはいて、眼鏡をずっとこけさせて、毎日毎

日内職している女が、太郎の好きなオードリー・ヘップバーンみたいで繊細で感傷的だなどということは、誰も期待しないんだ。

「これは、太郎に改めて聞きたいんだけど、太郎は本当に、名古屋で、勉強する気があるんだろうね」

太郎は七面鳥になったような気分だった。赤くなり、青くなりして、怒りたかった。

「本当に勉強したいんなら、この間から、考えていたことなんだけど、太郎には、住む所に、法外な贅沢をさせてやってもいいと思ってるの」

「どういう、ふうに？」

「下宿の部屋借りるのもいいけど、アパートを買って上げてもいい」

父母はそのことについて、もう再三、再四話し合っていた。

「あなたには言わなかったけどね、この間、本田の悌四郎さんがうちへ来た時、ちょっと相談したのよ」

本田悌四郎というのは、父方の従弟で、ミシン会社に出ていたが、名古屋支店次長になって、半年ほど前から名古屋に単身赴任していた。先月だか先々月だかたまたま、「ういろう」の箱を下げてやって来たのである。

「悌四郎さんに言わせると、太郎が最低で四年間、もしか

したら大学院まで名古屋で過すんなら、部屋借りるより、アパート買って、太郎が東京へ帰る時は、売って来ればいい、と言うのよ。その方が、大して儲かりやしないだろうけど、気分のいいところにいられるだけトクだって言うの。でも、悌四郎さんが来た時には、まだ、ちょっとのことで、そんな気分にならなかったのよ」

「この人、お金あるの？」

太郎は人差指で、父親の肩のあたりを指しながら、しかし決して父親の顔は見ずに、母に尋ねた。太郎は何だか、そういう話にふれるのが恐しかった。

「楽々、ひよいと買えるというわけにはいかないけどね」

信子が言った。

「そりゃ、少しは貯えらしいものはあるわよ。二人で働いてるんだもの、うちは。だけど、アパートを買ってもいいかな、って思ったのは、世田谷のお祖母ちゃんがお金を少し残してくれたでしょう。あれと、今度の本が売れたからね、少し」

世田谷のお祖母ちゃんは、母方の祖母である。母の兄、つまり伯父一家と暮していたが、この春、七十九歳で亡くなったのである。祖母にはとくに財産らしいものもない。それにすっかり惚けてしまっただけから十年間近く、面倒を見て来てくれた兄と嫂に、恩義こそあれ、母は遺産の分け前